特色ある区づくり事業「じゅんさい池みらいプロジェクト」
第３回 じゅんさい池みらい会議　会議概要

開催日時	令和３年３月２１日（日）午後１時３０分～３時３０分
会　　場	東区役所１階　会議室Ａ
出席委員	五十嵐委員、佐藤委員、長谷川委員、服部委員、山中委員
事 務 局	地域課長ほか同課より３名、区民生活課長ほか同課より１名、建設課より１名
概　　要	**【報告】** 前回会議の振り返り及び本プロジェクトの工程を確認した後、事務局より、以下の点について報告しました。 ・東山の下小学校の取組みについて（渡邉委員より提供） ・令和２年度に実施した広報、ＰＲについて ・里潟研究ネットワーク会議との連携（ガイドブックの作成）について **【議事】** 各議事における委員からの主な意見は以下のとおりです。 **（１）基本的な考え方について** ・「学びの場としての活用」について、単にガイドブックや看板を作って終わるのではなく、効果的な活用方法を考えてほしい。また、活用してもらう相手方の状況などを予め把握したうえで、活用の計画を検討した方が良い。 ・東山の下小学校の取組みは素晴らしいと感じた。基本的な考え方として未来を担う世代に対する視点を取り入れたのは良いと思う。 ・今後、具体的に取組方針を検討していくにあたり、①池を未来に残すための手入れ、②未来を担う世代へのはたらきかけ、③魅力のＰＲ・情報発信の３つの視点の関連づけが大切。これらの視点が反映された取組みを有効に動かすということを念頭にプランを策定してほしい。 ・事務局案の目指す姿の文言は、じゅんさい池以外の潟や公園などに広く共用できるもののように思う。じゅんさい池の特性などが入り、このプロジェクトだけのスローガンになると良いのではないか。 ・これらの考え方やそれに基づく取組方針について、行政と地域とで同じ意識を共有できるかが大切。 **（２）「（仮）じゅんさい池みらいプラン」の策定について** ・まちづくりの視点で活用するのか、環境保全を主眼とするのかなど、じゅん

概　　要	さい池をどうしていくかの大きな方向性や位置づけが必要なのではないか。 ・一旦、プランのフレームとして仮決めし、取組方針の議論の中で、課題や視点の修正をしながら進めていけば良いのではないか。 ・基本的な考え方や取組方針は、とりわけ、その取組みの実施主体が納得できるものでなくてはならない。検討にあたっては、その実施主体、体制についても連動して考えることが必要。資料２の概念図では、「取組みの方向性と実施体制」が分けられているように見えるが、取組内容や程度と実施主体は一体的に検討しなければならない。 ・みらいプランは行政計画なのか？任意計画なのか？ →（事務局）法令等に根拠のある計画ではないが、取組内容や実施主体の役割を記載していく予定であり、令和４年度以降はこのプランに基づいて取組みを実施していくイメージである。 **（３）方向性の検討に向けた魅力と課題の整理について** ・目指す方向性を見据えて、魅力や課題を考えるべき。前回の現地学習やアドバイザーの話を踏まえ、希有な地形など、他にはないじゅんさい池の固有性を守るためのまちづくりという方向性となるのではないか。 ・未来を担う子どもたちの感性を育むということも基本的な方向性のひとつではないか。 ・東区を空から見ると、海・川という水辺に囲まれており、その真ん中にじゅんさい池という水辺があるというように見える。公園としての活用やＰＲには、「水辺」「癒し」というところはポイントではないか。 ・事務局が魅力と課題を洗い出した資料では、東池・西池がひとまとめになっているが、東池は憩いや賑わいの場として活用、西池は自然や固有性を守るというように、それぞれの役割やゾーンでどう扱っていくかの方向性をすべきではないか。 ・これまでのセミナーやワークショップ等での意見などから魅力と課題を洗い出しているが、それらの場への参加者だけでなく、普段、散策などに訪れている人々の声を拾い上げることができると良いのではないか。 ・シダレザクラは木が弱ってきており、区が行っているホタルの飼育もこれまでどおりの継続が難しい状況であるとのことだが、区民の多くはその実情を知らない。策定するプランは、その実情を示すこともひとつのテーマと考えても良いのではないか。 ・ホタルの飼育を地域の学校等で引き受けたいとの意向もあるが、継続のコン

概　　要	センサスを得ることは簡単ではなく、容易に引き渡せるものではないだろう。 **（４）令和３年度の取組みについて** ・ガイドブックやＰＲグッズは、単に作成しただけでなく、有効に活用できるような計画を立てて配布してほしい。 ・里潟研究ネットワーク作成のガイドブックについて、小学生を対象とした簡易版のガイドブックを作成する予定とのことだが、子どもだけでなく地域の大人も対象に、例えば地域の勉強会のような場での活用も考えられるのではないか。 ・不特定多数に広く発信するだけでなく、現地学習とセットにしたツアーのような企画をするなど、関心やニーズがある相手を対象にした中身の濃い発信も考えるべき。 ・無関心層に少しでも興味をもってもらうための広報も必要だが、具体的な取組みにつなげるためには、実際の担い手と想定される地元やコアなところにどうはたらきかけるかも重要。 ・インターネット、ＳＮＳでの情報の動きは速い。ホームページは情報がより頻繁に更新されるよう努めてほしい。動画などが載っていると、興味をもってもらえるのではないか。